

かなでほんちゅうしんぐら

仮名手本忠臣蔵

〔解 説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。

八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのう）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

〔あらすじ〕

《大序》

暦応元年（一三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利將軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。

直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭之助は、兜を宝蔵に納めに行く。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説くが、戻ってきた若狭之助の機転により、顔世はその場を逃れることができた。怒った師直は若狭之助を罵倒、若狭之助はかろうじて憤りを抑える。

《二段目》

桃井家の奥座敷。若狭之助は、家老・加古川本蔵に、昨日の無念を晴らすため、明日は師直を討つ決心だとうち明ける。老功な本蔵は逆らわず、縁先の松の枝を伐って「まっこの通りさっぱりと遊ばせ」と述べる。

《三段目》

正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結ぶ。師直の勧めで本蔵も門内に入る。やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。腰元おかるは、顔世から師直への文箱を届けに来る。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入る。

「おのれ師直、真二つ」と意氣ごむ若狭之助の前に現れた師直は、前日とはうって変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭之助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができなかつた。

さて、判官が顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしるしと悟り、判官に散々当てこすりを言う。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまう。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵であつた。

館の騒動に、勘平は急ぎ裏門へ。判官が閉門を仰せつけられ、網乗物にて帰つたと聞き、動顛する。おかるとの逢瀬を楽しんで、主人の大事に居合わせなかつたことを恥じ、切腹しようとするが、おかるに止められ、おかるの在所、山崎へと落ちてゆく。

《四段目》

閉門中の判官のもとへ、上使、石堂馬之丞と薬師寺次郎左衛門が「国郡を没収し、切腹」との上意を伝えに来る。かねて覚悟していた判官が、刀を腹へ突き立てたところへ、国家老、大星由良之助が駆けつける。判官は「この九寸五分は汝へ形見、我が鬱憤を晴らさせよ」と息絶える。家来一同は、亡骸を菩提寺光明寺へと送り、斧九太夫ら不忠の者を除いて仇討ちの盟約をして城を明け渡す。

《五段目》

山崎で獵師をしながら帰参の時機を待っていた勘平は、夜の街道筋で朋輩千崎弥五郎に出会い、主君の石塔建

立の計画を聞き、御用金を調える事を約して別れた。

百姓与市兵衛は娘おかるを祇園へ売る約束をして得た半金五十両を懐にしての帰途、斧九太夫の倅、定九郎に金を奪われ、刺し殺される。そこに猪が通りかかり、それを狙った鉄砲が定九郎のあばらを貫いた。勘平は猪を打ちとめたと暗がりを手で探るとそれは人間であった。手に触れた財布を天の与えと押しいただき、千崎に届けようと後を追った。

《六段目》

勘平が家に帰ると、祇園町から一文字才兵衛がおかるを迎えに来ていた。自分のために遊女となる女房と両親の志を有難く思ったが、舅の与市兵衛はまだ帰らず、その時借りたという財布が、昨夜の旅人のものと同じなので勘平は苦悶した。おかるは別れを惜しんで連れて行かれる。

そこへ獵人仲間が与市兵衛の死骸をかつぎこんできた。勘平が驚く様子もないので、もしやと思い、母は色々尋ね、懐に手を入れると、血の付いた財布が出る。勘平は返す言葉もなく畳に伏して泣いた。そこへ原郷右衛門と千崎弥五郎が、主君に不忠をした者の金は使えないと、石塔料を返しに来た。母は天罰であると二人に舅殺しを訴えた。たまりかねた勘平は腹に刀を突き立て、ゆうべの事情を物語る。しかし、死骸を調べると鉄砲傷はなく、結果的に勘平は定九郎を撃って、親の仇討ちをしたことがわかる。勘平は徒党の連判に加えられ、血判して息絶える。

《七段目》

大星由良之助は祇園の力で遊蕩に耽っていた。血氣の若侍が煽っても、足輕の寺岡平右衛門がお供にと嘆願しても、全く他愛なく酔いつぶれている。そこへ由良之助の息子・カ弥が、判官の妻・顔世からの密書を届けに来る。あたりを見回して密書を読んでいると、縁の下からは九太夫が、二階からは、おかるが盗み読んでいた。由良之助はそれに気づき、おかるの身請け話をきめる。そこへおかるの兄平右衛門が来合わせ、おかるの話を聞くうちに由良之助の真意を悟り、手紙を盗み読んだ科によっておかるを斬り、それを手柄に連判に加わろうとする。おかるは兄の口から、父・与市兵衛と、夫・勘平の死を聞かされ、命はいらぬと覚悟したところへ、由良之助があらわれ、平右衛門にはお供をすることを許し、おかるには夫に代わり、縁の下の九太夫を討たせる。

《八段目》道行旅路の嫁入

如古川本蔵の娘・小浪は、由良之助の息子・カ弥と許嫁の仲であった。由良之助一家が山科に住んでいること知って、継母・戸無頼と二人きり、供も連れず山科へと旅を続ける。

《九段目》

雪の山科、由良之助の閑居へ、戸無頼と小浪が到着する。由良之助の妻・お石は愛想良く出迎えるが、賄賂を贈るような追従者の娘と、二君に仕えぬ由良之助の大事な子とは釣り合わない、破談を言いわたす。思い余った母娘が死のうとするのをお石は止めて、祝言をさせたければ本蔵の首をと所望する。本蔵が抱きとめたば

かりに、判官は本望を遂げられなかった。その恨みの本蔵の首を婿引出にと迫る。母娘が再び途方にくれる所へ虚無僧姿に身をやつした本蔵が現れ、わざと力弥の手にかかる。本蔵の本心を見ぬいた由良之助に小浪の祝言を頼み、師直屋敷の絵図面を渡して死んでゆく。(山科閑居の段)

《十段目》

堺の商人・天河屋義平は、召し使いも女房もよそへ出し、一人で討入りの諸道具を調達している。由良之助は、同士の疑念をはらすため、同士を捕手として入りこませ、義平を糾明するが、頑として明かさない。由良之助はそれを賞して「天河」を討入りの際の合い言葉と決め、鎌倉へと向かう。

《十一段目》

一同は、稲村ヶ崎に上陸し、雪の中、鎌倉の師直邸の討入る。由良之助は、判官形見の短剣で師直の首をかき、亡君の位牌に供え、焼香する。一同は、菩提寺光明寺へと引き上げる。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

道行旅路の嫁入

浮世とは誰がいひ初めて飛鳥川、ふちも知行も瀬と
かはり、よるべも浪の下人に、結ぶ塩谷の誤りは、恋
のかせ杭加古川の、娘小浪が許婚結納も取らずその
ままにふりすてられし物思ひ、母の思ひは山科の婿の
力弥を力にて、住家へ押しして嫁入りも、世にありなし
の義理遠慮。腰元連れず乗物もやめて親子の二人連れ。
都の空に志す、雪の肌へも寒空は、寒紅梅の色添ひて、
手先覚へず凍え坂。薩垂峠にさしかかり、見返れば富
士の煙の空に消へ、行方も知れぬ思ひをば、晴らす嫁
入の門火ぞと、祝ふて三保の松原につづく、並松街道
を狭しと打つたる行列は誰と知らねどうらやまし。
ア、世が世ならあの如く、一度の晴と花かざり、伊達
をするがの府中過ぎ。城下過ぐれば気散じに母の心も

いそ／＼と、二世の盃済んで後、閨の睦言私言、親
知らず子知らずと鳶の細道もつれ合ひ、男松の肌おまつにひ
つたりとしめてかためし新枕。女夫が中の若緑、抱い
て寝松の千代かけて、変るまいぞの睦言は嬉しからう
とほのめけば、
アノ母様の差合ひを脇へこかして。宇津の山辺の現うつつ
にも、夢にも早う大井川、水の流れと人心、都の花に
比ぶれば、日蔭の紅葉色づいて、つひ秋が来て小男鹿さおしかの
妻故ならば朝夕に辛苦するものなんのその。この手柏
のうら若き二人が中にやや産んで、ねん／＼ころろん
や、ねんねが守はどこへ行た、どことは知れたその人
に逢ふて恨みをなんとまあ、どう言ふてよからうと、
辛気島田しんきのうさはらし。
我が身の上を。かくとだに、人しらすかの橋越へて行
けば吉田や赤坂の、招く女の声揃へ、縁を結ばば、

清水寺へ参らんせ。音羽の滝にざんぶりざ、毎日さう
言ふて拝まんせ、さうじやいな、紫色雁ししがんこうがかい高我開令入給。

神楽太鼓にヨイコノエイ、こちらの昼寝を覚まされた。

都殿御に逢ふて辛さが語りたや。ソウトモく。もし
も女夫とかかさまならば伊勢さんのひきあはせ。

鄙ひなびた歌も身にとりてよい吉相になるみ濁。熱田の社

あれかとよ。七里の渡し帆を上げて艀拍子揃へてヤツ

シツシ。舵取る音は。鈴虫かいや、きりぎりすなくや

霜夜と詠みたるは、小夜更けてこそくれ迄と、限りあ

る舟急がんと母が走れば、娘も走り空の霰に笠覆ひ舟

路の友の後や先。庄野亀山せきとむる伊勢と吾妻の別

れ道。駅路の鈴の鈴鹿越え、間あいの土山雨が降る。水口みなぐち

の端に言ひはやす石部石場で大石や、小石拾ふて我が

夫となでつきすりつ手に据ゑて、やがて大津や三井寺

の麓を越えて山科へ程なき里へ
(急ぎゆく)

山科閑居の段

引立て入りにける。人の心の奥深き山科の隠家を、

訪ねてここに来る人は、加古川本蔵行国が女房戸無

瀬。道の案内の乗物をかたへに待たせたゞ一人、刀

脇差さすが実げに行儀乱さず庵の戸口。

「頼みませうく」

といふ声に、襷外して飛んで出る昔の奏者今のりん、

「どうれ」

といふもつかうどなる。

「ハツ大星由良助様お宅はこれかな。さやうならば

加古川本蔵が女房戸無瀬でござります。まことにそ

の後は打絶えました。ちとお目にかかりたい様子に

つき、はるく参りましたと伝へられて下され」

と言ひ入れさせて、表の方。

「乗物これへ」

と昇き寄せさせ、

「娘ここへ」

と呼出せば、谷の戸あけて鶯の梅見付けたるほゞ笑顔。目深に着たる帽子のうち、

「アノ力弥様のお屋敷はもうここかえ。わしや恥かしい」

となまめかし。取散らす物片付けて、

「まづお通りなされませ」

と下女が伝へる口上に、

「駕籠の者みな帰れ。サ、ご案内頼みます」

といふも、いそ／＼娘の小浪、母に付添ひ座に直れば、お石しとやかに出で迎ひ、

「これは／＼、お二方ともようぞやお出で。とくよりお目にもかかる筈、お聞きおよびの今の身の上。

お訪ねに預りお恥づかしい」

「あの改まつたお詞。お目にかゝるは今日初めなれど先立てご子息力弥殿に、娘小浪を許婚致したからは、お前なり私なりあいやけ 姑 同士。ご遠慮に及ばぬ事」

「これは／＼痛み入る御挨拶。ことに御用繁い本蔵様の奥方、寒空といひ思ひがけない御上京。戸無瀬様はともあれ小浪御寮、さぞ都珍しからう。祇園、清水、智恩院、大仏様御覧じたか。金閣寺拝見あらばよいつてがあるぞえ」

と心置きなき挨拶に、ただ、

「あい／＼」

も口のうち、帽子まばゆき風情なり。戸無瀬は行儀改めて、

「今日参る事余の儀に非ず。これなる娘小浪許婚致して後、御主人塩谷殿不慮の儀につき由良助様、力

弥殿御在所も定かならず。移り変わるは世の習ひ。変らぬは親心とやかくと聞合せ、この山科にござる由承りました故、この方にも時分の娘、早うお渡し申したさ。近頃押付けがましいが、夫も参る筈なれど出仕に隙のない身の上、この二腰は夫が魂。これを差せばすなはち夫本蔵が名代と私が役の二人前。由良助様にも御意得まし、祝言させて落着きたい。幸ひ今日は日柄もよし、御用意なされ下さりませ」と相述ぶる。

「これは思ひも寄らぬ仰せ。折悪う夫由良助は他行さりながらもし宿におりましてお目にかかり申さうならば『御親切の段千万忝う存じます。許婚致した時は、故殿様の御恩にあづかり、御知行頂戴致しまかりある故、本蔵様の娘御をもらひませう、しからばくれうと言ひ約束は申したれども、ただ今は

浪人、人遣ひとてもござらぬ内へ、いかに約束なればとて、大身な加古川殿の御息女。世話に申す提灯に釣鐘、釣合はぬは不縁のもと。ハテ結納たのみを遣はしたと申すではなし、どれへなりと外々へ御遠慮なう遣はされませ」と申さるるでござりませう」

と聞いてはつとは思ひながら、

「アノまあお石様のおつしやる事。いかに卑下なされうとて本蔵と由良助様、身上が釣合はぬとな。そんならば申しませう。手前の主人は小身故家老を勤むる本蔵は五百石。塩谷殿は大名、御家老の由良助様は千五百石。すりや本蔵が知行とは、千石違ふを合点で許婚はなされぬか。ただ今は御浪人。本蔵が知行とはみな違うてから五百石」

「イヤそのお詞違ひます。五百石はさて置き、一万石違うても心と心が釣合へば、大身の娘でも嫁に

とるまいものでもない」

「こりや聞き所お石様。心と心が釣合はぬとおつしやるは、どの心じやサ、それ聞かう」

「主人塩谷判官様の御生害、御短慮とはいひながら正直を本とするお心より起りし事。それにひきかへ師直に金銀を以てこびへつらふ追従武士の祿を取る本蔵殿と、二君に仕へぬ由良助が大事の子に釣合はぬ女房は持たされぬ」

と聞きもあへず膝立て直し、

「へつらひ武士とは誰が事。様子によつては聞捨てられぬ。がまあそこを赦すが娘の可愛さ。夫に負けるは女房の常。祝言あらうがあるまいが、許婚あるからは天下晴れての力弥が女房」

「ム、面白い。女房ならば夫が去る。力弥に代つてこの母が去つた、去つた」

と言ひ放し、心隔ての唐紙をはたと引立て入りにける。娘はわつと泣出し、

「折角思ひ思はれて許婚した力弥様に、逢はせてやろとのお詞を頼りに思ふて来たものを。姑御の胴欲に去られる覚えわたしやない。母様どうぞ詫言して祝言させて下さりませ」

とすがり歎けば、母親は娘の顔をつく／＼と打眺め打眺め、

「親の欲目か知らねども、ほんにそなたの器量なら十人並にもまさつた娘。よい婿をがたと詮議して許婚した力弥殿。訪ねて来た甲斐もなう、婿にも知らさず去つたとは、義理にもいはれぬお石殿。姑去りは心得ぬ。さては浪人の身のよるべなう筋目を言ひ立て、有徳な町人の婿になつて義理も法も忘れたな。ノウ小浪今いふ通りの男の性根。去つたといふを面

当欲しがる所は山々。ほかへ嫁入りする気はないか。大事のところ、泣かずともしつかりと返事しや。コレどうぢや〜」

と尋ねる親の気は張弓。

「アノ母さまの胸欲な事おつしやります。国を出る折父さまのおつしやつたは、浪人しても大星力弥、行儀といひ器量といひ幸せな婿を取つた。貞女両夫に見えず、たとへ夫に別れてもまたの殿御を設けな^{まみ}よ。主ある女の不義同然、必ず〜寝覚めにも殿御大事を忘るるな。由良助夫婦の衆へ孝行つくし、夫婦仲睦じいとてあじやらにも、愷^{みもち}気ばしして去らるるな。案ぜうかとして隠さずと、懷妊になつたら早速に知らせてくれとおつしやつたをわたしやよう覚えてる。去られて往んで父様に苦に苦をかけてどう言ふてどう言訳があらうとも、力弥様よりほかに

余の殿御、わしやいや〜〜」

と一筋に恋をたてぬく心根を、聞くに堪えかね、母親の涙一途に突詰めし覚悟の刀抜放せば、

「母さまこれは何事」

と押留められて顔を上げ、

「何事とは〜曲がないはいの。今もそなたがいふ通り一時も早う祝言させ、初孫の顔見たいと、娘に甘いは父の習ひ。喜んでござる中へまだ祝言もせぬ先に去られて戻りましたとてどう連れて往なれうぞ。といふて先に合点せにや、しやうもやうもないわいの。ことにそなたは先妻の子。わしとはなさぬ仲ぢや故およそにしたかと思はれては、どうも生きてはゐられぬ義理。この通りを死んだ後で父御へ言訳してたもや」

「アノもつたいたい事おつしやります。殿御に嫌は

れわたしこそ死すべき筈。生きてお世話になる上に
苦を見せまする不孝者。母さまの手にかけてわたし
を殺して下さいませ。去られても殿御の家こゝで死
ぬれば本望ぢや、早う殺して下さいませ」

「オ、よう言やつた。でかしやつた〜。そなたば
かり殺しはせぬ。この母も三途の供、そなたをおれ
が手にかけて母も追付け後から行く。覚悟はよいか」
と立派にも涙とどめて立ちかかり、

「コレ小浪。ア、アレあれを聞きや、表に虚無僧の
尺八、鶴の巢籠り。鳥類でさへ子を思ふに、科もな
い子を手にかけるは、因果と因果の寄合ひ」

と思へば足も立ちかねて、震ふ拳をやう〜に振上
ぐる刃の下。尋常に座を占め、手を合せ、

「南無阿弥陀仏」

と唱ふる中より、

「御無用」

と声かけられて思はずも、たるみし拳尺八も、とも
にひつそと静まりしが。

「オ、そふじや。いま御無用と止めたは虚無僧〜
の尺八よな。助けたいが山々で、無用といふに気後
れし、未練など笑はれな。娘覚悟はよいかや」

とまた振上ぐるまた吹出す。とたんの拍子にまた

「御無用」

「ム、また御無用と止めたは、修行者の手のうちか
振上げたこの手のうちか」

「イヤお刀の手のうち御無用。倅力弥に祝言させう」

「エ、さういふ声はお石様。そりや真実かまことか」
と尋ぬる襖のうちよりも、

〜あひに相生の松こそ目出たかりけれ

と祝儀の小謡白木のこじほう小四方。目八分に携へ出で、

「義理ある仲の一人娘、殺さうとまで思ひつめた戸

無瀬様の心底、小浪殿の貞女。志がいとほしき、さ

せにくい祝言さす。その代り世の常ならぬ嫁の盃、

受取るはこの三方。御用意あらば」

とさし置けば、少しは心休まりて、抜いたる刀鞘に

納め、

「世の常ならぬ盃とは引出物の御所望ならん。この

二腰は夫が重代。刀は正宗、差添は浪の平行安。家

にも身にも代へぬ重宝。これを引出」

とみなまでいはさず、

「イヤコレ浪人と侮つて価の高いこの二腰。まさか

の時に売り払へといはぬばかりの婿引出。御所望申

すはこれではない」

「ム、そんなら何が御所望ぞ」

「ヲ、この三方へは加古川本蔵殿のお首をのせて

貰ひたい」

「エ、そりやまたなげな」

「サイノ。御主人塩谷判官様。高師直にお恨みあつ

て鎌倉殿で一刀に斬りかけ給ふ。その時こなたの夫

加古川本蔵、その座にあつて抱き留め殿を支へたば

つかりに、御本望も遂げられず、敵はやうやう薄傷

ばかり、殿はやみく御切腹。口へこそ出し給はね、

その時の御無念は、本蔵殿に憎しみがかるまいか、

サあるまいか。家来の身としてその加古川が娘、安

閑と女房に持つやうな力弥じやと思ふての祝言な

らば、コレこの三方へ本蔵殿の白髮首。いやとあれ

ばどなたでも、首を並ぶる尉ウヂとウヂ。それ見た上で

盃させう。サ、いやか、おうかの返答を」

と鋭き詞の理屈づめ。親子ははつとさしうつむき、

途方に

暮れし折柄に、

「加古川本蔵が首進上申す。お受取りなされよ」

と表に控へし虚無僧の、笠脱ぎ捨ててしづ／＼とうちへ入るは、

「ヤアお前は父様」

「本蔵殿。ここにはどうして。このなりは合点がい
かぬ。こりやどうぢや」

と咎むる女房、

「ヤアざわ／＼と見苦しい。始終の仔細みな聞いた。
そちたちに知らさずここへ来た、様子は追つてまず

黙れ。イヤナニそこもとが由良助殿の御内証アア
ア、お石殿よな。今日の仕儀かくあらんと思ひ、

妻子にも知らせず様子をうかがふ加古川本蔵。案に
違はず拙者が首、婿引出に欲しいとな。ハ、ハ、ハ、い

やはやそれや侍のいふ事さ。主人の仇を報はんとい

ふ所存もなく、遊興に耽り大酒に性根を乱し、放埒

なる身持、日本一の阿呆の鑑。蛙の子は蛙になる。

親に劣らぬ力弼めが大戯だわけだわい。狼狽武士のなま
くら銅、この本蔵が首は切れぬ。馬鹿つくすな」

と踏み砕く。

「割れ三方のふち放れ、こつちから婿にとらぬ。ち
よございな女め」

といはせも果てず、

「ヤア過言なぞ本蔵殿。浪人の錆刀、切れるか切れ
ぬか塩梅見せう。不肖ながら由良助が女房、望む相

手じや。サア勝負、／＼／＼」
と裾引上げ、長押にかけたる槍追取り、突きかから

んずその気色、
「これは短気な、マア待つて」

と留め隔つる女房、娘。

「コリヤ邪魔ひろぐな」

と荒けなく右と、左へ引退くる、間あいもあらせず突掛
る、槍のしほくび引掴み、もぢつて払へば身を背向
け、もろ足縫はんと閃めかす。刃背はむねを蹴つて蹴上ぐ
れば、拳放れて取落す。槍奪はれじと走り寄る、腰
際帯際引掴み、どうと打付け動かせず、膝に引敷く
豪気の本蔵。敷かれてお石が無念の齒がみ。親子は
ハア／＼危ぶむ中へ、駆出る大星力弥。捨てたる槍
を取る手も見せず、本蔵が右手めでのあばら、左手ゆんでへ
通れと突通す。うんとばかりにかつぱと伏す。

「コハ情なや」

と母娘。取りつき歎くに、目もかけず、とどめ刺さ
んと取直す。

「ヤア待て力弥。早まるな」

と槍引留めて由良助。手負に向ひ、

「一別以来珍しし本蔵殿。御計略の念願届き、婿力
弥が手にかかつて、さぞ本望でござらうの」

と星をさいたる大星が詞に、本蔵目を見聞き、

「主人の鬱憤を晴らさんとこのほどの心遣ひ、遊所
の都合に気をゆるませ、徒党の人数は揃ひつらん。

思へば貴殿の身の上はこの本蔵が身にあるべき筈。

当春鶴が岡造營のみぎり、主人桃井若狭之助、高師
直に恥しめられ、もつてのほか御憤り。それがしを

密かに召され、まつかう／＼の物語。明日御殿にて

出くはせ一刀に討留むるとのコレ思ひつめたる御

顔色。止めても止まらぬ若気の短慮。小身故に師直

に、賄賂まいたい薄きを根に持つて恥しめたと知つたる故、

主人に知らせず不相応の金銀衣服台の物、師直へ持

参して心にそまぬへつらひも、主人を大事と存ずる

から。賄賂おほせあつちから謝つて出た故に、斬る

に斬られぬ拍子抜け。主人が恨みもさりと晴れ、相手代つて塩谷殿の難儀となつたは即ちその日。相

手死なずば切腹にも及ぶまじと、抱き止めたは思ひ

過ごした本蔵が、一生の誤りは娘が難儀と、白髪

この首、婿に進ぜたさ。女房、娘を先へのぼし、こ

びへつらひしを身の科にお暇を願うてなコリヤ、道

を変へてそち達より二日前に京着。若い折の遊芸が

役にたつた四日のうち、こなたの所存を見抜いた本

蔵、手にかかれば恨みを晴れ、約束の通りこの娘、

力弥に添はせて下さらば未来永劫御恩は忘れぬ。コ

レ手を合はして頼み入る。忠義にならでは捨てぬ命

子故に捨つる親心。コレ／＼推量あれ由良助殿」

といふも涙にむせ返れば、妻や娘はあるにもあられ

ず、

「ほんにかうとは露知らず、死に遅れたばかりに、

お命捨つるはあんまりな。冥加のほどが恐しい。許して下され父上」

とかつぱと伏して泣叫ぶ、親子が心思ひやり、大星

親子三人も、ともにしをれて居たりしが、

「ヤア／＼本蔵殿、君子はその罪を憎んでその人を

憎まずといへば、縁は縁、恨みは恨みと、格別の沙

汰もあるべきにとさぞ恨みに思はれんが、所詮この

世を去る人。底意を明けて見せ申さん」

と未然を察して奥庭の障子さらりと引開くれば、雪

をつかねて石塔の五輪の形を二ツまで、造り立てし

は大星がなり行く果てをあらはせり。戸無瀬はさか

しく、

「オ、御主人の仇を討つて後、二君に仕へず消ゆる

といふお心のアレあの雪。力弥殿もその心で娘を去

つたの胴慾は、ご不愍余つてお石様。恨んだがわし

や悲しい」

「ア、コレ〜戸無瀬様のおつしやる事、玉椿の八千代までも祝はれず、後家になる嫁取つた、マコのような目出たい悲しい事はない。コレ〜〜かういふ事がいやさにナむごうつらう言ふたのが、さぞ憎かつたでござんしよのう」

「イ、エイナわたしこそ腹立つまま、町人の婿になつて義理も法も忘れたかといふたのが恥づかしいやら悲しいやら、どうも顔が上げられぬお石様」

「アこれ〜〜戸無瀬様。氏も器量もすぐれた子。何としてこのやうに果報つたない生れや」

と声も涙にせき上ぐる。本蔵熱き涙をおさへ、

「ハツア、嬉しやご本望や。呉王を諫めて誅せられ辱かしめを笑ひし呉子胥が忠義はとるに足らず。忠

臣の鑑とは唐土の予讓、日本の大星。昔よりいまに

至るまで唐と日本にたつた二人。その一人を親に持つ力弥が妻になつたるは、女御更衣にようこにそなはるより、百倍まさつてそちが身は、武士の娘の手柄者。手柄な娘が婿殿へお引の目録進上」

と懐中より取出すを、力弥取つておし戴き、開き見ればコハ如何に、目録ならぬ師直が屋敷の案内。一

一に玄関、長屋、待部屋。水門、物置、柴部屋まで絵図くわに委しく書付けたり。由良助、はつと押戴き、

「へツエありがたし〜。徒党の人数は揃へども敵地の案内知れざる故、発足もナこれ、これまでは延引せり。この絵図こそは孫呉が秘書。我がための六韜三略。かねて夜討と定めたれば、継梯子にて塀を越え、忍び入るには縁側の雨戸はつせば直ぐに居間。ここをしきつてコレ〜、コレ〜コレかう攻めて」

と親子が喜び、手負ながらもぬからぬ本蔵、

「イヤ／＼それは僻言ならん。用心厳しき高師直、障子襖はみな尻差し。雨戸に合榫合枢。こぢては外れず大榫かけやにて、毀こぼたば音して用意せんが、サ、／＼それはいかが」

「オ、それこそ術てだてあれ。凝つては思案に能はずと、遊所よりの帰るさ。思ひ寄つたる前栽せんざいのアレ／＼あの雪持つ竹。雨戸をはずす我が工夫。仕様をここに

と庭に下りしも雪深く、さしにも強き大竹も、雪の重さにひいわりと、しはりし竹を引廻して鴨居にはめ、

「雪にたはむは弓同然。コレこの如く弓を拵へ弦を張り、鴨居と敷居にはめ置きて、サ、／＼一度に切つて放つ時は、まつこのやうに」

と積もつたる枝打払へば、雪散つて伸びるは直ぐな

る竹の力。鴨居たはんで溝はづれ、障子残らずバタ／＼。本蔵苦しき打忘れ、

「ハ、／＼、ウム、ハ、／＼、ウムハ、／＼、アしたり／＼。計略といひ義心といひ、かほどの家来を持ちながら、了簡もあるべきに、浅きたくみの塩谷殿。口惜しき振舞ひや」

と悔やみを聞くに、

「御主人の御短慮なる御仕業。今の忠義を戦場のお馬先にて尽くさば」

と思へば無念に閉ぢふさがる。胸は七重の門の戸を、洩るるは涙ばかりなり。力弥はしづ／＼降り立つて、父が前に手をつかへ、

「本蔵殿の寸志により、敵地の案内知れたる上は、泉州堺の天川屋義平方へも通達し、荷物の工面仕らん」

と聞きもあへず、

「なにさ〜、山科にある事隠れなき由良助。人数集めは人目あり。ひとまず堺へ下つて後あれから直ぐに発足せん。その方は母嫁戸無瀬殿もろともに、後の片付諸事万事何もかも、心残りのなきやうに。ナ、コリヤあすの夜舟に下るべし。我は幸ひ本蔵殿の忍び姿を我が姿」

と袈裟打ちかけて、編笠に恩を戴く報謝返し。未来の迷ひ晴らさんため、

「今宵一夜は嫁御寮へ」

舅が情の恋慕流し。歌口しめして立ち出づれば、かねて覚悟のお石が歎き、

「ア、これももうし御本望を」とばかりにて名残り惜しさの山々を、言はぬ心のいぢらしき。手負は今を

知死期時、

「父さま。もうし父さま」

と呼べど、答へぬ断末魔。親子の縁も玉の緒も。切れて一世のうき別れ。わつと泣く母、泣く娘。ともに死骸に向ひ地の、回向念仏は恋無常。出で行く足も立ち留り、六字の御名を笛の音に、

「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏」

これや尺八煩惱ほんのうの枕並ぶる追善供養。閨ねやの契りは一夜ぎり。心残して立出づる。